

税で守られている私たちの暮らし

北見市立端野中学校 三年 山田 望愛

私は、二十八週で生まれ超低体重出生児としてNICUに半年程入院していたと聞かされた。産まれたばかりの私は片手にのる程の大きさだったという。障害が残る可能性、医療費の事、様々な事を同時に考えなくてはいけなくて母は不安で一杯だったという。その時の主治医がこんな事を言ったという。「医者は神様じゃないし医療には限界がある、授かりたくても授かれない人もいれば出産までたどり着かない命もある。医者が絶対と言ってはいけないのだけれど、それでも絶対に助けるからもう泣かないでほしい。赤ちゃんはお母さんに泣いてほしくて産まれてくる子は一人もいないのだから」と。

その言葉を信じて母は手術室に向かったと聞いた。産まれたばかりの私は人工呼吸器がつけられて無数の点滴の管があり、本当にこの命は助かるのかと思うほどの姿だったという。母は障害が残る心配もあつたが、かかる医療費の金額を聞いていてとても払えないと思うほど高額だったと言う。日本では高額医療費制度のおかげで月に払う医療費の限度額以上は払わなくてもよい制度がある。私は産まれたその瞬間から、顔も見たことのない人が納めた税金のおかげで医療を受けることができたのだ。この話を聞くまで税金を意識したのは消費税くらいだった私には衝撃だった。世の中の人が緩くつながっている中心には税があると感じた。教科書、給食費、公共施設、医療費、様々な場面で私達は日々税で守られ暮らしているのだ。

少子高齢化や物価高騰が問題になっている今、私達にできる事は何だろうと考えた。「税」と聞くとあまりいいイメージが沸かない。それはなぜか。私達は税金の正しい使い道を知らないからではないかと私は思う。今こそ、税について正しい知識を持ち、中学生の私達も納税者だという意識を持つ必要があるのではないだろうか。私の人生は、産まれた瞬間から税で支えられてきたと言っても過言ではない。これからも社会保障制度の恩恵を受ける私達は感謝を忘れず、今自分にできる事を最大限取り組みたい。

そして、成人を迎えた際には恩返しのできる気持ちで納税したいと思う。

税金とは未来を変える事のできる切符だと私は考える。私達は知らず知らずのうちに税金で支え、支えられているのだ。この「支え、支えられている」循環に私も参加する時はすぐそこまで来ている。中学生の私にできる事はまだ少ないのかもしれないが、二年后成人を迎えた時には税についての正しい知識と使い道をしつかりと理解し、税によって世の中が「支え、支えられていて自分もその一員なんだ」という自覚をもった納税者になりたいと思う。